

食糧危機を解決したい 稲塚 権次郎

「小麦農林10号」の生みの親 コシヒカリの基となる米を開発 「緑の革命」の功労者

1897(明治30)年2月24日—1988(昭和63)年12月7日



ダーウィンの『進化論』を学ぶ

東砺波郡能美村(現南砺市)で農家の長男に生まれました。幼いころから勉強が好きで、学校ではずっと成績が一番でした。県立福野農学校(現県立南砺福

野高校)へ進み、担任の先生からダーウィンの『進化論』を勧められ、遺伝や品種改良について興味をもちました。

権次郎の生まれた家



たくさんとれる作物品種を開発したい

権次郎は農学校を卒業して小学校の代用教員をしながら、進学を目指して勉強しました。東京帝国大学農科大学農学実科(現東京大学)に合格した権次郎は当時の新しい学問であったメンデルの法則*や育種学を勉強して知識を高めました。権次郎は身に付けた新しい知識や技能を生かせる農商務省農事試験場に就職しました。この年1918(大正7)年、富山県で米騒動

が起こり、政府は米の生産を増やすのに懸命でした。農事試験場の課題は、冷害や病害虫に耐え、収量の多い作物品種を早く作り上げることでした。

また、富山県では内務省の役人から射水郡長になった南原繁(香川県出身)が、下条川・新堀川改修工事計画を県知事に訴え、湿地だった射水平野を乾田化する基礎づくりを行っています。



東京帝国大学農科大学



学生時代の権次郎

東北の冷害から農民を救う

権次郎は秋田県にある農事試験場陸羽支場に転勤しました。ここでは以前から進められていた稲の品種改良を担当し、いろいろな品種の中から冷害に強いものを見つけられました。その品種は、「陸羽132号」と名づけられました。「陸羽132号」が見つけたことで、たびたび起こった大凶作から抜け出すことができ、この発見は地元の人たちを喜ばせまし

た。岩手県に住んでいた宮沢賢治も詩の中でほめたたたえただけでした。

農事試験場陸羽支場での権次郎の仕事は新潟県農事試験場の研究員に引き継がれ、後に「水稲農林1号」が完成しました。やがてこの品種から「コシヒカリ」や「ササニシキ」などの品種が生まれていきました。



熱心に研究する権次郎

*メンデルの法則【めんでるのほうそく】 オーストリアの植物学者メンデルはエンドウ豆などを研究中、掛け合わせ方によって遺伝にきまりがあることを発見しました。彼の死後、複数の学者らによってこの法則が証明されました。

ノーベル賞を生んだ奇跡の小麦

権次郎はその後、岩手県農事試験場に転勤し、ここでは小麦の品種改良を進めました。1929(昭和4)年に「小麦農林1号」を開発してからも、アメリカ産や日本産の品種を掛け合わせてできた種を使って栽培を繰り返し、「小麦農林10号」を開発しました。穂が大きく背が低いこの品種は、倒れにくく、たくさん収穫できる特長があり、岩手、山形県の奨励品種に選ばれました。権次郎は1938(昭和13)年までに「小麦農林10号」をはじめとして8種類の新品種を作りました。

「小麦農林10号」の種はその後、メキシコで小麦の研究をしていたアメリカのボーローグ博士の手に渡りました。博士は「小麦農林10号」とメキシコの小麦とを掛け合わせ、それまでの2倍、3倍の小

麦がとれる奇跡のような品種を開発したのです。これにより、世界的な食糧不足を解決する道が開かれました。このことは、「緑の革命」と呼ばれています。博士はその功績で1970(昭和45)年、ノーベル平和賞に輝いています。



小麦の生育を見守る権次郎



小麦農林10号(富山県立南砺福野高校蔵)



岩手県立農事試験場全景

夢や志をかなえたポイント

- 学校で習うことに興味をもつ
- 学んだことを社会のために生かす
- 自分の仕事に全力を尽くす

豆知識 南原繁は射水郡立農業公民学校(現県立小杉高校)創設を立案するなど富山県の農業の発展に貢献し、後に東京大学総長を務めました。

1897(明治30)	0歳
東砺波郡能美村に生まれる	
1911(明治44)	14歳
県立福野農学校に入学	
1915(大正4)	18歳
東京帝国大学農科大学農学実科に入学	
1918(大正7)	21歳
農商務省に入省	
1935(昭和10)	38歳
「小麦農林10号」を開発	
1938(昭和13)	41歳
中国の華北産業科学研究所に勤める	
1948(昭和23)	51歳
金沢農地事務局に勤める	
1951(昭和26)	54歳
農業技術功労賞を受賞	
1971(昭和46)	74歳
勲三等瑞宝章を受章	
1980(昭和55)	83歳
農林水産大臣表彰を受賞	
1982(昭和57)	85歳
城端町の名誉町民に選ばれる	
1988(昭和63)	91歳
亡くなる	

コラム ノーベル賞受賞者が権次郎の生家で講演

ボーローグ博士は1981(昭和56)年10月、金沢市で開かれた日本育種学会で権次郎と感激の初対面を果たしました。さらに権次郎が亡くなった2年後、城端の権次郎の生家を訪れ、南砺農業会館で「小麦農林10号と緑の革命」と題し、講演して権次郎の仕事の偉大さをたたえました。



権次郎(左)とボーローグ博士との初対面